



Japan Arts Foundation

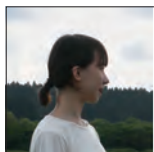
公益財団法人 日本文化藝術財団

2025 年度日本文化藝術奨学金 受給者

公益財団法人日本文化藝術財団は、日本の伝統文化および現代芸術の保護、育成および振興、普及向上の取組みのひとつとして、国内の芸術系大学院に就学する学生で、優れた技能・才能・将来性を評価できる者に対し、奨学金給付を行なっています。「2025年度日本文化藝術奨学金」は、84名の応募者の中から選考委員により選出された以下の14名への給付が決定し、ひとり50万円の奨学金(返済不要)が支払われます。また、同奨学金の授与式が、2026年2月13日に明治記念館において、「創造する伝統賞」の授賞式と併せて執り行われます。

日本文化藝術奨学金 選考委員

近藤 健一(森美術館 シニア・キュレーター) 杉浦 幸子(社会設計家(芸術文化領域)/武蔵野美術大学 教授) 竹内万里子(写真批評家/京都芸術大学 教授)
椿 昇(現代美術家/京都芸術大学 教授) 三瀬夏之介(美術家/東北芸術工科大学 教授)



桑田 早綺 KUWATA Saki

秋田公立美術大学
大学院 複合芸術研究科 複合芸術専攻
修士課程1年

本研究は「地面に蓄積され続ける、人々の生活やふるまい」に焦点を当てた映像や空間表現を通じて、不可視の他者―すなわち過去や未来に属する存在、あるいは制度的・社会的に周縁化された存在―の層を、現在の空間に立ち上げ、共在のあり方を探ることを目的とする。急速に変化する都市環境の中で失われつつある、声なき存在への想像力を取り戻すことを目指し、制作を展開させていく。

【選評】建築環境の手法をベースに辺境を複合的な視点によって捉え直すことによって「不可視の他者」を立ち上げていく取り組みは、今後の社会の倫理的なあり方に届く可能性を秘めている。既存の現代美術の枠組みにとらわれないアウトプットが期待される。(三瀬夏之介)



映像《2歳のあなた、70歳の娘》2025



代 孟旋 DAI Mengxuan

秋田公立美術大学
大学院 複合芸術研究科 複合芸術専攻
博士課程1年

私は「現代芸術における楮紙と線香の表現―東洋美学を中心に」を研究テーマに、現代美術と伝統的な東洋美学の融合を探索し、特に日本と中国の文化交流を促進することを目的に、「現代的な表現で伝統的な東洋文化を描く」ことに努めている。その主な取り組みは、手作りの楮紙を線香で燃やすことで水墨画の五色(焦、濃、重、淡、清)を再現し、伝統技法と現代美術を融合させることにある。

【選評】楮紙と線香という伝統的な素材を組み合わせ、コンセプチュアルな作品に練り上げているところに、作品の芯の強さを感じる。今後は素材研究をさらに徹底し、アジアの枠組みを超えて世界で幅広く活躍できるアーティストに成長することを強く期待している。(竹内万里子)



《心像シリーズNo.00》2025



川田 英里佳 KAWATA Erika

東北芸術工科大学
大学院 芸術工学研究科 芸術文化専攻 絵画[日本画]領域
修士課程1年

私は、SNS で見た絵画や写真、映画の一場面やポスターなど、他者が切り取ったイメージや身の回りの断片的なイメージを起点に世界の輪郭を捉えるドローイングや絵画作品を制作している。アーティストやキュレーター、小説家や映画監督など、ものを作る人は全員が「偉大な先人たちの目を借りてものを見ている」と思っており、私はその点に意識的でありたいと考えている。

【選評】アーティスト志望の学生達と話をしたり作品を見たりする瞬間ほど創発的な瞬間はない。対話を通じて作品への理解はより深まり未発見の認知プロセスを確認する事になる。特にドローイングや気儘にノートの片隅に書いた言葉にその人が気づかない素直さが滲んでいることがある。なにもにも変えたいオリジンが、その筆触に軽やかに踊っているようだ。(椿 昇)



《home of spirits》岩絵具、水干、和紙 2023



野口 駆 NOGUCHI Kakeru

東京藝術大学
大学院 映像研究科 メディア映像専攻
修士課程1年

モーションセンサーを用いたジャグリングパフォーマンスや、スマートウォッチの健康データを仮想通貨化する作品など、映像、センサーデバイス、身体表現を組み合わせた作品を通じて、人間の認知やインタラクションの再構築に取り組んできた。メディア技術の選択や表現形式がいかにして新たな問いを生み出すかに関心を持ち、身体運動の再構成と映像表現の関係性を主題に研究を進めている。

【選評】テクノロジーの変化と革新によって生まれる新たな世界に期待できる人と、そこに心理的距離を感じる人との差が拡大する現在、野口の表現は、そのスペクトラムにアクセスし、アートを身近に感じる可能性を生み出している。人間の身体的認知力の重要性がますます高まる今、日本という地理的バウンダリーを超えて、世界の刺激を受け、アート領域の新機軸を開拓することを強く期待している。(杉浦幸子)



《仮想通貨ルンルン》ディスプレイ、PC、ChatGPT 2025



澤田 詩園 SAWADA Shion

東京藝術大学
大学院 美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻
修士課程1年

私は認知症を対話のたびに作り出される一度きりの世界と捉え、写真制作と出版に取り組んできた。それらの実践を融合させて映像を制作し、操作可能な形式に展開することで、観賞者と作品のモデルとなる認知症の人との間に、間接的な対話や世界の再構築を試みる。今後は身体性を取り入れたインスタレーションや、障害を伴う記憶の「保存と変容」の出版にも挑戦したい。

【選評】複数の方法を組み合わせながら、人が生きていく上でささくれているようにある、小さな、しかしかけがえのない事象を繊細に見つめ、語ろうとしている真摯な姿勢がとても深く印象に残った。今後はぜひ空間としての展開も含め、芯のあるアーティストとして成長されることを願っている。(竹内 万里子)



《おそらく手相のようにある》2024



藤井 杏莉 FUJII Anri

東京藝術大学
大学院 美術研究科 建築専攻 建築設計第2研究室(中山英之研究室)
修士課程1年

私は、利益を追求し激化した人工都市環境が生み出す多様な熱や風、リズムの力学的状況を新しい自然環境と捉え「私の権利だけではない都市の建築」をテーマにしている。また、建築設計から派生したドローイングや図面、模型写真が、単なる建築プロジェクトの説明資料を超え、独自の表現媒体として作品の本質を訴えかける力を持つと信じ、その新たな価値を探究し、世界に提示したい。

【選評】これまで手がけたプロジェクトに、社会をより「豊か」な場所にしたいという、藤井の素直な思いを感じた。外界に対する飽くなく好奇心に育まれた緻密なリサーチと繰り返し行われた自問自答が表出したポートフォリオに現れているその素直さは、これからの環境デザインに最も必要な資質の一つであると選者は感じている。研究を深め、実装された空間とそこに流れる時間を体験できることを楽しみにしている。(杉浦幸子)



《鳥が飛んだら虹ができる》石膏、木粘土、アルミ、モルタル 2025



渡辺 忠典

WATANABE Tadanori

東京藝術大学

大学院 美術研究科 絵画専攻 壁画第2研究室
修士課程1年

私は足音や触覚、空気の流れから起こる現象を美術的側面から捉え、その観点を身体感覚と関わりの深い媒体である音を利用し有形化する装置としての作品を制作している。西欧古典壁画技法の研究や、東京藝大音楽科の方々との交流、雅楽やガムランなどの音響・舞台環境を参考に、舞台芸術的側面を持つ作品及びプロジェクトの企画・制作を軸とした研究を進めている。

【選評】これは彫刻なのか？楽器なのか？音楽なのか？音なのか？美術的視点から辿り着いた楽器のガジェットがパフォーマンスと共に空間に広がり、身体性の拡張システムになっていることが興味深い。渡辺のいう「移動式仮設建築構造物」を見て体験してみたい。(三瀬夏之介)



《Feedbacker》2025



後藤 結依子

GOTO Yuiko

多摩美術大学

大学院 美術研究科 絵画専攻 日本画
修士課程1年

「私とは何か」「日本画とは何か」という問いのもとに、筆墨表現を「今を生きる身体」の延長」として捉えながら、「東アジアの連続体としての絵画の実践」に取り組んでいる。水墨画を漫画の形式で描いたり、作品に鑑賞者が参加できるなど「遊び」を取り入れた作品のあり方を模索しており、その中に東洋絵画の制作論や哲学を取り入れることで、聖と俗を混合させるような作品を制作する。

【選評】後藤の制作は現代における筆墨表現の研究に止まらないだろう。日本画を考える上でこれまで切り捨てられてきた詩書画や漫画といった形式を導入する絵画は独自性を示している。留学生との協働による東アジア文化圏への旅へ出ていく後藤を応援したい。(三瀬夏之介)



《宇宙のこどもたち》雲肌麻紙、墨、顔彩 2025



趙 彤陽

Zhao Tongyang

京都芸術大学

大学院 芸術研究科 芸術専攻
博士課程2年

私は、AI写真という言葉の出現、画像生成メカニズム、創作者の表現の境界という三つの側面から、AI写真における暴力性の多層的構造を考察し、AI写真が人々の画像に対する知覚をいかに再構築するか明らかにすることを目指している。日本の都市風景、現代人の欲望、そしてAI技術を背景に、写真とインスタレーションを組み合わせた一連の作品を制作し、国際的な舞台で発表を試みる。

【選評】自身の身体と個人的な恋愛の記憶をベースにした初期作品から、AI技術「deepnude」を使用した近作へと展開することによって作品が社会性を帯びつつある。インスタレーションも観客の欲望を喚起させることに成功しており今後が期待される。(三瀬夏之介)



《Look at you, look at me》2024



大城 咲和

OSHIRO Sawa

京都市立芸術大学

大学院 美術研究科 芸術学専攻
修士課程1年

美術の文脈におけるアーティスト・ブックとそれらを取り巻く環境に関心を持つ。卒業論文では、アーティスト・ブックが普及した1960年代から70年代の展開を整理し、とりわけフルクサスの芸術家による出版物を分析した。卒業論文をふまえ現在は、アーティスト・ブックの社会受容に着目し、それらが受容される場としてのアートブックフェアとその公共性に関する研究を行なっている。

【選評】アーティストブックは、アートの縮図であると同時に、社会の縮図でもあり、アートを手の中で鑑賞することができる新たな展示空間でもある。20世紀末からデジタイゼーションが進行し、紙を媒体とした本の衰退が危惧されたが、歴史を踏えつつ、螺旋状に一段先に進んだ地点で大城が展開するアーティストブックの実践的研究は、非常にパーソナルなアートとの邂逅を生み出すと同時に、社会を変える可能性を秘めている。(杉浦幸子)



卒業論文及び関連資料の展示 2025



CHANG HEEYOON

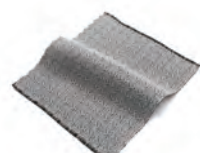
チャンヒユン

多摩美術大学

大学院 美術研究科 デザイン専攻 テキスタイルデザイン
修士課程1年

研究テーマは「反復から考えるテキスタイル」。同じパターンの繰り返しが生み出す空間性や偶然性のもたらす力を探り、テキスタイルを通じて表現することを目指している。イギリスでの学部時代は、主に「布を作ること」を目的としていたが、「手仕事」の大切さや美しさを楽しむ日本の文化に強く魅了され、現在は、日本の染織文化やアートを融合させたテキスタイル表現に取り組んでいる。

【選評】チャンの織り出す布は、静かだ。シンプルなパターンと、白やグレーといった色彩から生み出されているその静謐さは、織るという行為に潜む重層性と対をなし、彼女の個性を伝えてくる。彼女の目を通して見た景色が重なり合い、反復し、織り込まれていた布からは、多様な文化を身体的に感じ取り、学ぶ姿勢が感じられる。その布で生み出した服を着ることで、チャンの世界を五感で鑑賞してみたいと思っている。(杉浦幸子)



《白》シルク、ポリエステル/二重織り 2022



久木田 大地

KUKITA Daichi

武蔵野美術大学

大学院 造形研究科 美術専攻 油絵コース
修士課程1年

「現代社会において古典絵画がいかに受容されているか」という事柄を念頭におき、名画を引用しながら要素の反復・組み替えなどによって視覚的な驚きを探ると共に、イメージの流通に関する考察を行なっている。今後は21世紀の消費社会における古典絵画の受容環境を引き続き観測し、人々の間で発生するイメージの流通についての考察、そしてオリエンタリズムの突破についての検討を行う。

【選評】学生時代からルブリーヨフのアイコンや李朝の民画になぜ強く惹かれるのか気になっていた。その謎を解こうと奮闘する次世代の表現者が顕れた事に期待が膨らむ。そして未解決のまま漂うオリエンタリズムという言説への新たな挑戦を企図する姿も凛々しい。とはいえ「反復と抽象」の回路設計にはやや短絡が見受けられ、お会いしてより深く話を聞けることを楽しみにしている。(樫 昇)



《Repetition_ふらんこ 01》板、油彩 2024



馮 一夫

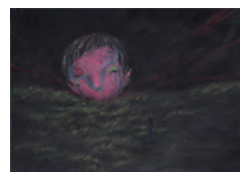
Feng Yifu

京都芸術大学

大学院 芸術研究科 芸術専攻
博士課程1年

私は、社会と現実の表現を中心に、アニメーションにおけるシュルレアリスム手法を明らかにし、現代の文脈に適した新たな創作方法論を構築するとともに、自作によってその実践的可能性を検証することを目指している。近年、CG技術の発展に伴い、アニメーション表現は写実的傾向を強めつつあるが、そうした表現の硬直化に対し、想像力と形式の自由を再び解放する可能性を示していきたい。

【選評】チェコのブランドフ撮影所にも訪問し、日本展で訪日されたヤン・シュヴァンクマイエル師へのインタビューをさせていただいた事がある。その折に師は「私はシュルレアリストである」と何度も語られた事を思い起こした。もう言葉を弄する必要のない馮氏の筆致は、AI全盛の時代にあっても脅威の新星と呼ぶに相応しい。迷路に迷い込んだシュルレアリスムを救い出そうとする彼の野望に乾杯である。(樫 昇)



2D アニメーション《記憶の残響》2023



山崎 愛彦

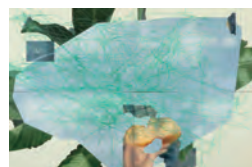
YAMAZAKI Yoshihiko

京都市立芸術大学

大学院 美術研究科 版画領域
博士課程2年

SNSに共有した写真をソフトウェアで分解・再構築し、複数の時間や場所を組み込んだコラージュを下図に絵画を制作する。作品はさらに中国画として引用され、入れ子状に蓄積されていく。作られたイメージの重なりは、日常的な断片を媒介にして、空虚さを含みながらも「保存」や「流通」といった現代の視覚文化を可視化する試みとなっている。

【選評】アナログとデジタルの両方を駆使し、SNSが跋扈する現代社会で「見ること」の制度を意欲的に問う姿勢がとても頼もしい。徹底して思考しつつも、視覚的な可能性を押し広げようとする点も魅力的だ。今後毎日アップデートしながら自らの殻を打ち破り、さらなる展開を強く期待したいと思う。(竹内 万里子)



《8da0b6 (に、五条、岡崎、豊崎)》キャンバスにアクリル絵具、シルクスクリーン 2025